

## 押韻技法の観点から見た名詞 hant の用法

武 市 修

### はじめに

日本語の「手」は具体的な体の重要な一部を表わすことから「急須の手」など物にも適用され、「打つ手が無い」、「その手の品」など手段・方法・種類などを表わし、人との関わりや関係についても「手を結ぶ」、「手を広げる」と言い、また、「権力を手にする」「手を伸ばす」など支配力や勢力を意味する用法も多い。方向を示すと「上手、下手」となり、それが技術の巧拙を表わす場合には「上手、下手」となる。また、形容詞や形容動詞に付いて「手痛い」、「手荒だ」などその意味を強める。他にも「手のこんだ」、「手心を加える」、「触手を伸ばす」など枚挙にいとまがないほど「手」は比喩的な意味で、実に多様に用いられる。

一般に言語体系が異なれば、当然、異なる言語構造から表現形式も異なる。しかし、それにも拘わらず一見何の関わりもない言語間にも人間の営みとして共通する語の用法が見られるものである。日本語の「手」を表わす今日のドイツ語の *Hand* にもよく似た意味内容・用法が見られる。しかしここではそのような日独の比較をすることが目的ではなく、中高ドイツ語の hant を押韻技法の観点から取り上げ、その特徴を明らかにすることが本稿の眼目である。

筆者はこれまで押韻技法の観点から、名詞の迂言表現として *dinc*, *êre*, *liebe*, *geschicht*, *gewin*, *mære*, *lip* を扱ってきた<sup>1</sup>。その続きとして hant の用

---

1 『中世ドイツ叙事文学の表現形式』—押韻技法の観点から— 近代文芸社、2006年、145-165ページ。『イーヴァイン』における名詞 *mære* の用法、関西大学『独逸文学』52号（2008年3月19日）、23-49ページ。名詞の迂言表現—押韻技法の観点から *lip* の場合—、大阪大学ドイツ文学会『独逸文学報』第24号（2008年11月1日）、

法の検討を進めているが、これまでの検討結果をここでまとめてみたい。

## 1. hant のさまざまな用法

### 1.1. 本来の「手」およびその比喩的な用法

中高ドイツ語の辞書には hant の項目<sup>2</sup>にさまざまな作品から非常に多くの用例が挙げられているが、意味上の分類としては大雑把に、本来の意味と「物を置く側」という意味の二つしか分類されず、わずかに二つ目の意味から「種類」を表わすことになるということが説明され、いくつかの用例が挙げられているのみである。しかしそれぞれに挙げられた用例とそれに付された現代語の説明から見ると、これらの hant にもさまざまなニュアンスの違いがある。筆者がこれまで輪読会などで読んだ作品の中から書き留めてきた、中高ドイツ語の叙事詩に現われる hant の用例をいくつか挙げてみよう。先ず、『パルツイヴァール』から次の2例を取り出してみよう（下線は筆者、以下同様）。

- 1) unt den künge edel gesteine / teilte Gahmuretes hant, /  
und ouch swaz er dâ fürsten vant. (Parz. 100, 30-101, 2)  
そして王たちには、そしてまた、そこにいた諸侯たちにも  
ガハムレトが手ずから宝石を分け与えた。
- 2) da ergienc ein sölhiu hohgezît,  
swer der hât gelîchet sît,  
des hant iedoch gewaldes phlac. (Parz. 100, 23-25)  
x | x̄ x | x̄ x̄ | x̄ ^ |  
そこではとても盛大な祝宴が催された。  
のちにそれと同じような祝宴を催した者があるとすれば  
その人は大きな勢力をもっていたに違いない。

---

17-39ページ。

2 Vgl. G. F. Benecke / Wilhelm Müller / Fr. Zarncke: *Mittelhochdeutsches Wörterbuch*, 1, 627a, 31-631b, 35.

本題に入る前に先ず、これらの文に見られる、構文上新高ドイツ語にはない用法を説明しなければならない。例 1) の 3 行目 *swaz* の関係文中には *swaz* にかかる、部分を表わす複数 2 格 *fürsten* があるが、このような *swaz* 文（新高ドイツ語では、不定関係代名詞は *swaz* でなく *was* で、それが部分の 2 格を伴うことはない）が表わすものを受けなおす時には、新高ドイツ語ではふつう中性の人称代名詞あるいは指示代名詞が用いられる。しかし中高ドイツ語ではそれとまったく異なり、通常 *swaz* 文中の 2 格の複数名詞に合わせて複数の指示代名詞が用いられる。ところが、ここではそれが表わされておらず、*swaz* の前に 1 行目の *den künigen* と同格の、*swaz* 文中の *fürsten* を指す指示代名詞複数 3 格 *den* を補って考えねばならない。また、例 2) の 2 行目の *der* は前行の *ein sölhü hōhgezit* を指す指示代名詞の 3 格で、動詞 *gelichen* の目的語になっており、「同じような祝宴を催す」という意味である。さらに、1 行目の *sōlh* の具体的な説明が 2 行目以下の 2 行となっており、主文と従属文という関係になっていない。動詞 *phlac* が文末に置かれているのは副文だからではなく、次行の *bewac* と押韻する必要からである。新高ドイツ語なら *solch ein Fest, dass* ～となるところが、中高ドイツ語ではこの例のような緩やかなつながりも含めてさまざまな可能性がある。

さて、本題に入ると、上例の 1) では動詞 *teilte* の主語は *Gahmuret* *hant* であるが、もし *hant* を使わずに 1 格の *Gahmuret* とするとニュアンスが大きく異なる。というのも、直前に *aräbesch golt geteilet wart / armen rîtern al gemeine* (100, 28f.) 「アラビア産の黄金が貧しい騎士たちに皆同じように分け与えられた」とあり、身分の低い騎士たちにはおそらく家臣に黄金を与えさせたが、王侯にはガハムレット王自身が自らの手で与えたということが、*hant* を使うことによりはっきり示されていると言える<sup>3</sup>。もちろんここは、押韻上もこの表現が必要なことは言うまで

3 D. キューン (Dieter Kühn) はこの個所を *Gahmuret verteilte selbst* と訳し、P. クネヒト (Peter Knecht) は *den Königen schenkte die Hand Gahmuretes Edelsteine* で表わしているのも頷ける。Wolfram von Eschenbach: *Parzival*. Band I, Nach der Ausgabe Karl Lachmanns, revidiert und kommentiert von Eberhard Nellmann, übertragen von Dieter Kühn, Frankfurt am Main: Deutscher Klassiker Verlag 1994.; および Wolfram von

もない。

これに対して2)では、2行目の *swer* の関係文で表わされる人を3行目の指示代名詞 *des* で受け、*des hant* が1)と同じように動詞(ここでは *phlac*)の主語になっている。直訳すれば「その人の手は何と言っても大きな勢力をもっていた」ということになろう。2)の *hant* にも支配力や勢力を表わす意味が内包されているが、*swer* で表わされている人そのものを受ける指示代名詞の1格 *der* を用いる場合とどれほど明確な違いがあるのだろうか<sup>4</sup>。ここは押韻の必要もなく、*des hant* の代わりに指示代名詞の1格 *der* でも、次のように行首余剰音がなくなりタクトが揚音で始まることになるだけで、韻律上問題はない。以下に見るように *hant* の語法も大抵は押韻とリズムに関係しているが、ここはおそらくは文体上の問題であろう。

*der iedoch gewaldes phlac*  
 | x̣ x | x̣ x | x̣ x | x̣ ^ |

実際、同じような表現で、例2)のように指示代名詞の2格と *hant* を用いず、関係文ではあるが次のように1格だけの表現もある。*hant* を用いるのとそうでないのとではどれほどニュアンスの相違があるのか、微妙なところである。もちろん3)ではこの行は、この表現で1音節の行首余剰音のあと強音と弱音が交替するスムーズな流れになっている。

- 3) *die gebrueder wârn von hôher art, /*  
*von Nînus, der gewaldes pflac / ê wurde gestiftet Baldac.*  
 x | x̣ x | x̣ x | x̣ x | x̣ ^ | (Parz. 102, 10-12)  
 この二人の兄弟は高い血筋で、バクダードが建設される前

---

Eschenbach: *Parzival*. *Mittelhochdeutscher Text nach der 6. Ausgabe von K. Lachmann, Übersetzung von Peter Knecht, Einführung zum Text von Bernd Schirok, Berlin / New York 1998*の当該箇所を参照。

4) 上のふたりの訳者もこの個所はそれぞれ *das muß ein ganz gewaltiger Herr gewesen sein* および *der mußte große Macht besitzen* として、とくに *hant* の意味を出していない。

権勢を振るっていたニーヌスの後裔であった。

この文の3行目の *ê* は *ehe* の意味の従属接続詞であるが、動詞 *wurde* (*werden* の接続法過去<sup>5</sup>) が直後に来ている。ここもこの語順は押韻とリズムのためで、2) の場合とは逆である。このように中高ドイツ語の脚韻文学では、動詞の語順は主文と副文の判定基準にはならない。

同じひとつの動詞の主語に *hant* を用いるのとそうでない用例をもうひと組見てみよう。

4) *vor den wirt nimmer niht gespart,*

*des ie bejagen mac mîn hant.* (Parz. 8, 6-7)

およそ私が手に入れられる限りのものは決して  
彼らの前で惜しまれない (= 惜しみなく分け与えよう)

5) *Sigmunt unde Siglint die mohten wol bejagen*

*mit guote michel êre; des teilte vil ir hant.* (Nib. 29, 2-3)

ジグムントとジグリントは財宝によって大きな誉れを  
手に入れる術を心得ていた。彼らは多くの財宝を分け与えた。

例4)の2行目の *des* は、置かれた位置からすると関係代名詞であるが、主文で *niht* にかかる先行詞の役割をする2格の指示代名詞 *des* と関係文で *bejagen* の目的語になる4格の関係代名詞 *daz* を一語で兼ねる働きをするもので、*des, daz* (新高ドイツ語なら *dessen, was* となるところ) が2格の形に牽引されて一語で表わされたものである。これは中高ドイツ語によく見られる独特の現象で、強弱の音節からなるタクトが1行中に4つ(『ニーバルングンの歌』では4行1節の1行目から3行目までは7つ、4行目だけ8つ)と韻律上制限された範囲内で、音節数を少なく

---

5 比較の対象を導く接続詞 *danne* や *ê* の文中では、上位文が肯定の時にはふつう接続法になった。これも中高ドイツ語独特の現象である。Vgl. Hermann Paul: *Mittelhochdeutsche Grammatik*, 19. Aufl., bearbeitet von W. Mitzka, 2. Druck. Tübingen 1966, § 368.

する一つの便利な手段であった<sup>6</sup>。動詞 *bejagen* の主語はここでは *mîn hant* だが、例 5) では 1 行目の前半で挙げられた *Sigmunt* と *Siglint* を後行で受けなおす複数の指示代名詞 *die* である。例 1) と違って 4) の *mîn hant* にはほとんど意味はなさそうであり、*ich* では押韻できないのでこの表現になっていると考えられる。この例の 2 行目も動詞 *teilte* の主語が例 1) と同じように *hant* であるが、ここはとくに「彼らが手ずから分け与えた」というほど強い意味はなく、押韻の関係で人称代名詞 *si* でなく *ir hant* になっている。3 人の翻訳者<sup>7</sup>とも、この *ir hant* の訳にとくに *hant* は出さず、3 人称複数の人称代名詞 *si* で表わしている。

次に『善人ゲーアハルト』からの 3 例を見よう。

6) *sô gab ich mit mîner hant / eteswenn ein alt gewant,* (g. Gerh. 955f.)

そんな時私は自分の手で時には古着ぐらいは施しましたが、

7) *daz mir niemen ist erkant / über elliu heidischiu lant*

*dem ich sî gæbe âne bant, / wan eine mînes herren hant,*

(g. Gerh. 1931-34)

すべての異教徒の国中で私が彼らを縛なしに引き渡すべき人は  
ただひとり我が主以外に誰も知らないということを、

8) *von Kant des herzogen hant / ist in der werdekeit erkant / ...*

ケント公の名望は次のことでよく知られている (g. Gerh. 6191f.)

---

6 *haben* の代わりに *hân*, *lâzen* の代わりに *lân* などの縮約形が多用されたのもこの理由によるところが大きい。逆に音節数を多くする必要のある時は、*ich* の代わりに *mîn lip* を用いるなどのいわゆる迂言表現が大いに利用された。武市修『中世ドイツ叙事文学の表現形式』、「はじめに」を参照。

7 *Das Nibelungenlied*. *Mittelhochdeutscher Text und Übertragung*, 2 Teile. Hrsg., übersetzt und mit einem Anhang versehen von Helmut Brackert, Frankfurt am Main 1987; *Das Nibelungenlied*. *Mittelhochdeutsch / Neuhochdeutsch*. Nach dem Text von Karl Bartsch und Helmut de Boor ins Neuhochdeutsche übersetzt und kommentiert von Siegfried Grosse, Stuttgart 1997および*Das Nibelungenlied*. Nach der Handschrift C der Badischen Landesbibliothek Karlsruhe, *Mittelhochdeutsch und Neuhochdeutsch*. Hrsg. und übersetzt von Ursula Schulze, Regensburg 2005の当該箇所を参照。

6) の mit mîner hant の hant はまさに私の「手」そのものを意味する。これに対し7) では直訳すれば「ただ一つ私の主の御手」であるが、3行目の関係代名詞 dem の先行詞が1行目の人を表わす niemen であり、それと比べているので、とくにここでは「手」が強調されているわけではなく、bant と押韻する必要から hant が用いられていると思われる。8) ではそれが一層はっきりしている。直訳すれば「ケントの公爵の手はその名望において、次のことでよく知られていた」であるが、意味するところはまさに der herzog von Kant である。しかしそれでは押韻は可能であるものの行を満たせないの、韻律上の必要からこのような表現になっており、これも一種の迂言表現である。同じような迂言表現で、人の書き換えとみなされる hant が複数になっている極めてまれな用例が『ニーベルンゲンの歌』にあるので、それを見てみよう。

9) sô sol ich lâzen kiesen, daz die hende mîn

x | ẋ x | ẋ x | - | ẋ ^ | ẋ x | ẋ x | ẋ ^

wellent vil gewaltec hie zen Burgonden sîn. (Nib. 122, 3-4)

| ẋ x | ẋ x | - | ẋ ^ | ẋ x | - | ẋ x | ẋ ^

それならわしがここブルゴントの国で大きな力を持っていることを見せてやろう。

ここは1格のウムラウト形 hende と動詞 wellent の語形から、主語 die hende mîn は明らかに複数形であることが分かる。押韻のために mîn が行末に置かれているが、このような迂言用法ではふつう単数の hant が用いられるのに、ここはどうして複数にしなければならないのであろうか。これはこの行の滑らかな流れを作り、次行の前行のリズムを整える必要からこの形にせざるを得ないのであろう。すなわち、単数の hant にすればこの後行は4音節となり、そのうちで強音が3つになるため、行が滑らかに流れない。また、次行の前行も wellent でなく wil となるため、5音節のうち強音が4つになり、これもぎごちない流れになる。行の下に韻律符号を示したように、これらの形でそれぞれの行のリズムが滑らかになるのである。

hant が押韻のために用いられている例をもう少し見ると、

- 10) Ich gibe iu mîne triuwe und sicherliche hant,  
daz ich mit iu rîte heim in iuwer lant. (Nib. 2340, 1-2)  
私は真心かけて確かにお誓いしよう、  
そなた達と共にそなた達の国元へ参ることを。

この *sicherliche hant* を辞書では *sicherheit* とほぼ同義だとしている<sup>8</sup>。しかし H. デ・ボーア (Helmut de Boor) は脚注で、これは *zusichernden Handschlag* 「手を打って誓うこと」だとして、「手」の十全の意味を認めている<sup>9</sup>。他のふたりの編者も彼の解釈を採り、それぞれ „*Ich gebe Euch mein Wort und sichere es Euch durch Handschlag zu, daß ...*“ および „*Ich gebe euch mein Wort und verspreche in die Hand, daß ...*“ と訳している<sup>10</sup>。

それでは同じく『ニーベルンゲンの歌』からの次の例はどうだろうか。

- 11) er sprach: „sich sol vermezzen niht wider mich dîn hant.  
ich bin ein künec rîche, sô bistu küneges man. (Nib. 118, 2-3)  
彼は言った『そなたが思い上がってわしに挑戦するなどは。  
わしは富貴な王である。しかしそなたは王の一介の家臣にすぎぬ。

*sich wider jm vermezzen* は「思い上がって (不遜にも) ~に挑戦的な態度をとる」という意味で、2格の目的語をとることもある。この用例では主語 *dîn hant* の *hant* にはほとんど意味がなく、これも押韻上の必要から *dû* の代わりに *dîn hant* が使われている。『イーヴァイン』にも1例 *vermezzen* のこの用法が見られるが、次のように *hant* は用いられていない。

- 12) swes ich mich vermæze / wider unsern herren got, /

---

8 BMZ, II<sup>2</sup>, 259a, 13.

9 *Das Nibelungenlied*. Nach der Ausgabe von Karl Bartsch, hrsg. von Helmut de Boor, 22. revidierte und von Roswitha Wisniewski ergänzte Auflage, Mannheim 1988, Anm. zu 2340, 1.

10 H. Brackert および S. Grosse の当該箇所参照。

des gevieng ich schaden unde spot. (Iw. 5282-84)

もしも私が何か我らの主なる神様を冒瀆するようなことをすれば  
そのために私は損害と恥辱を受けることになる。

次の例はどうだろうか。

13) *sonne gewuohs an ritter milter hant*

vor im nie über elliu lant / ... (Parz. 26, 17-18)

また、彼以前にはどんな国においても

これ以上気前の良い騎士は生まれたためしはありません

14) *die tragent werliche hant*. (Parz. 48, 24)

彼らは戦闘能力に優れています。

13) の *milter* は形容詞 *milte* の比較級の無語尾形で *milter hant* が主語で、直訳すると「騎士の中でこれ以上気前のよい手が生まれたことはない」である。E. マルティン (Ernst Martin) はこの *milter hant* を *eine freigebigere Hand* として比較級であることを示し、ここでは比喩的に *größere Freigebigkeit* の意味であると注釈している<sup>11</sup>。 *gewuohs* は *wahsen* の直説法単数過去に前綴り *ge-* が付いた形で、*ge-* は動詞の過去形に付けられて過去完了に相当する役割を果たしている。この個所の *wahsen* は *entstehen* の意味で、前置詞 *an* + 人の 3 格を伴い、『ニーベルンゲンの歌』に見られる *waz êren an im wüehse und wie scene was sin lip* (Nib. 22, 3) 「どれほど彼の名望が高まり、いかに彼が美丈夫に成長したか」と同じように比喩的な表現である。ちなみに、H. デ・ボーアはこの部分を *wieviel Ehre in ihm heranwuchs* すなわち *wie ehrbegierig und zugleich ehrenvoll er sich entwickelte* の意味であると説明している<sup>12</sup>。14) の *hant* も比喩的に用いられ、*werliche hant tragen* で「戦闘能力に優れている」の意味である。*werliche hant* はさらに人を表わすこともあり、*die vuorten werliche*

11 *Wolfram's von Eschenbach Parzival und Titurel*. 2 Teile. Hrsg. von Ernst Martin, Halle 1900 u. 1903, 2. Teil, Anm. zu 26, 17.

12 Helmut de Boor, Anm. zu 22, 3.

hant (Wigal. 9569) が「彼らは男らしい勇士であった」となる。

hant が体の一部としての「手」から比喩的な意味に転用される用法を辞書に挙げられている例からさらに拾い出してみると、die hōhsten hant tragen (Parz. 269, 16. 316, 8その他多数)「最高の手をもっている」もので神を意味する。hant は tragen の目的語になって、また、

15) Willalm bin ich genant; / getrag ich immer gebende hant, /  
iu wirt vergolten disiu nar, (Willehalm 135, 17-19)

私はヴィレハルトと申します。もしいつか人に贈り物ができるようになれば、あなたにこのご馳走のお返しをいたします。

のように、gebende hant tragen「与える手をもつ」が「贈り物をすることができる状況になる」<sup>13</sup>の意味で用いられる。ところで、この例の2行目 getrag は次に続く弱音節 ich と母音衝突するため動詞の人称語尾 -e が欠けた形である。ここでは前綴り ge- は動詞の現在形について未来を表わしている。

hant はさらに、空間的に具体的な幅の広さを示す hende breit (Parz. 386, 25)「手の幅ほどの広さの」から、時間的長さの表示にも転用され einer hende wile (Kudr. 384, 3) で *so viel Zeit als man braucht, um die Hand umzukehren*「手のひらを返すほどの短い時間」を表わす。

hant はまた、前置詞の目的語になってさまざまな比喩的意味をも表わす。strit an der hant haben (Trist. 8709) で「戦いを背負い込む」、durch sine hende gân lâzen (Trist. 15219) で *untersuchen, prüfen*「調べる」を意味する<sup>14</sup>。sîn rede mit ir ze handen nemen (Trist. 19272) で「彼女と話し始める」、in mîner vrouwen hant sîn (Trist. 11410) で「御方様の支配下にある」、helt zen handen (Parz. 48, 30) で *kampfbereiter, tapferer Held*「てだれの勇士」<sup>15</sup>、さらに、副詞的にも用いられ、bi handen で *sogleich*、ze

13 Vgl. BMZ, I, 623a, 6ff.

14 Vgl. Gottfried von Straßburg: *Tristan*. Nach der Ausgabe von R. Bechstein, hrsg. von Peter Ganz. 2. Teile, Wiesbaden 1978, Anm. zu 15223.

15 Vgl. K. Bartsch, Anm. zu I, 1440.

ietweder *hant* で *zu beiden Seiten* の意味になる。

「手」はまた、さまざまな意思表示にも使われる。*die hant besliezen* (Erec 1413) で *nicht annehmen wollen, absagen* 「受け取ろうとしない、拒む」、*die hant bieten* (Nib. 250, 4) で *zusagen* 「約束する」を意味する。さらに *jm die hende valten* (Parz. 51, 8) 「両手を組み合わせる」で封臣が封主に対して忠誠の誓いをするしぐさを表わし、組み合わされて差し出された両手を君主は自分の両手に包みこんで封臣を受け入れることを示した。

### 1, 2. 「種類」、「方向」を表わす用法

「種類」を表わす *hant* はふつう、次のように数詞や形容詞 *al*, *manec* などを伴って複数の 2 格形で名詞にかかる<sup>16</sup>。

- 16) *daz ich selbe vierde ze vier tagen trage*  
*ie drîer hande kleider und alsô guot gewant,*  
*daz wir âne scande rûmen Prûnhilde lant.* (Nib. 360, 2-4)  
我々 4 人が 4 日間それぞれ 3 種類の衣装を、  
それも、恥をかかずにプリュンヒルトの国を  
立ち去れるような立派な装束を身に着けられるように

ここはグンテルがプリュンヒルトに求婚するためにイスラントの国へ 4 人で旅立つに当たり、かの国で恥ずかしい思いをしないように身に着けるべき豪華な衣装を整えてくれるよう、妹のクリエムヒルトに頼むくだりである。J. グリム (Jacob Grimm) によれば、古高ドイツ語では *hant* を「種類」の意味で用いた用例は見られないということである<sup>17</sup>が、中高ドイツ語になるとこの意味で *hant* はよく用いられる。また、中高ドイツ語の数詞は形容詞的に用いられる場合、1 から 12 まで語尾が付く

---

16 J. グリムは 16) の例は複数とみなしているが、このような 2 格の *hant* の多くは単数形である、あるいはそう思われるとしている。しかし形が同じでありその見極めは困難である。Vgl. J. Grimm : *Deutsche Grammatik*, 3, 78.

17 Ebenda, 3, 77.

ことがある。16) の *drier hande* は語尾が付いた複数 2 格で 4 格の *kleider* にかかり、*drier hande kleider* で「3 種類の衣装」である。

*hant* はまた、*dâ kêrt zer zeswen hende* (Parz. 225, 26) 「そこを右手に回れ」のように方向を表わし、このような *hant* がまた比喩的にも用いられて、

17) *ich lâze ez allez z'einer hant*

*beidiu liute unde lant.* (Trist. 14219-20)

私には国民もお国のことも

もうどうでもいいのです。

*allez ze einer hant lâzen* は「すべてを一つの方向へ捨てる」という意味から転じて、*sich nichts aus et machen, sich nicht um et kümmern* という比喩的な意味になり、ここでは「人民も国もいっさい自分にはどうでもよい」ということになる<sup>18</sup>。「種類」を表わす *hant* がまた、ほとんど意味をもたずに、

18) *die kunde er wol gemêren*

mit aller hande *reiner tugent.* (a. H. 63-64)

x |x̄ x | x̄ x | x̄ x | 〰 〰

彼はそれ [この世の誉れ] をあらゆる清らかな

徳操でもって十分に増やす術を心得ていた。

この *aller hande* は複数 2 格で *reiner tugent* にかかる。*reiner tugent* は単数 3 格であるが、集合的概念で複数に相当する。この例では *hande* にはほとんど意味がなく、行の下に示したようにリズムを整えるための迂言用法であろう。『ニーベルングンの歌』にもこれと同じような表現がある。

19) aller hande dinge *was er im gereht.* (Nib. 99, 2)

彼はジーフリトのどんな命令にも従わねばならなくなった。

---

18 BMZ, I, 947a, 37f.; P. Ganz (hrsg.): *Tristan*, 2. Teil, Anm. zu 24223.

ここは、威風堂々たる見知らぬ勇士がブルグント宮廷に姿を現わしたとき、それが誰か尋ねられたハゲネが、会ったことはないが噂に聞くジーフリトかもしれないと言って、主君たちにジーフリトの若い頃のエピソードを語る場面の一節である。すなわち、ジーフリトがある時、ニーベルンゲンの宝の分配をめぐる、シルブンクとニベルンクの兄弟が争っているところへ行き合わせ、仲裁の労を頼まれたのであれこれ和解案を示すが、ふたりは納得せず不満を露わにする。そこで腹を立てた勇士がふたりを含め、居合わせたニベルンク族をすべて討ち果たし、宝を自分のものにする。宝の番人であった力自慢のアルベリヒが主君の仇打ちをしようとして激しい戦いを挑むが、結局、打ちひしがれて屈服し、服従を誓うことになる。この例の *er* はアルベリヒのことである。

*aller hande* は複数の 2 格で *dinge* にかかり、*dinge* は名詞 *dinc* の複数 2 格である。H. デ・ボーアも脚注で説明しているように<sup>19</sup>、形容詞 *gereht* は人の 3 格と事柄の 2 格とともに「ある人のために進んであることを行なう用意がある」という意味で 3 人の訳者はそれぞれ *Alberich war zu jeder Art von Unterwürfigkeit bereit* (H. Brackert)、*Zu allem war Alberich bereit* (S. Grosse)、*Alberich war zu allen Diensten bereit* (Ursula Schurze) と訳している。ブラッケルトのみ、*hant* の「種類」という意味を残しているが、他のふたりはそれを省いているように、ここも *hant* の意味はほとんどなく、リズムを整えるためにこの表現になっていると言える。

また、稀に *hant* が名詞にかかることなく、それ自身が 2 格の形で 4 格や 1 格の代わりに用いられる例も見られる。

- 20) *lâ hœren, welher hande / kan man in dīnem lande?* (Trist. 3541-42)  
さあ、聞かせておくれ。君の国ではどんなことをやるの。
- 21) *der lûhte maniger hande mit schīne wider daz golt.* (Nib. 436, 3)  
これらのさまざまな宝石が黄金と競い合って光り輝いていた。

20) の *welcher hande* に R. ベヒシュタイン (Reinhold Bechstein) は脚注

---

19 Vgl. H. de Boor, Anm. zu 99, 2.

で「名詞を伴わないで *welcherlei, alles was* の意味である」<sup>20</sup>と述べ、彼の版を改訂した P. ガンツ (Peter Ganz) も *welcher Art* すなわち *was alles* の意味であると注を付けている<sup>21</sup>。動詞 *kunnen* (nhd. *können*) は 2 格の目的語をとることはなく、ここでは 2 格の *welcher hande* が単独で *kan* の目的語として 4 格の代わりをしているのである。21) の例でも *maniger hande* に対し H. デ・ボアが、これは *mancherlei* の意味で、これに *von den Steinen* を意味する 2 格の指示代名詞 *der* がかかっているとしているように、2 格 *maniger hande* が 1 格として扱われ、動詞 *lûhte* (*liuhten* の単数過去) の主語になっている。また、*mancherlei* の語形については *allerhand* を参照するようにと指示している<sup>22</sup>。ちなみに *mancherlei* の *-lei* も元来「種類」を意味する女性名詞であり、中高ドイツ語では *leige, leie* と綴られることもあるが、*aller hande* と同じように本来 2 格であり、今日の *allerhand, allerlei, mancherlei* などはそれらが一語で綴られて無変化の形容詞や名詞として用いられるようになったものである<sup>23</sup>。ついでに言えば、例 21) の *maniger hande* は B 写本と C 写本に見られる形であり、A 写本では *hande* でなく、しかも一語で綴られた *manigerleye* となっている。

教訓文学に位置づけられる『イタリアの客人』には *hant* の用例が少ないが、「力」を表わす用例と「側」の比喩的な用例の 2 例見ておこう。どちらも今日の *Hand* に共通する用法である。

22) *jâ ist gar in gotes hant / beidiu himel unde lant:* (W. Gast 6141-42)

まことに天も地もすべて神のみ手の中にあります。

23) *lûge ist mir widerzæme gar. / in einer hant si vreude treit  
in der andern sorge und leit.* (W. Gast 2044-46)

私は嘘は大嫌いです。それは一方では喜びをもたらすが、

20 Reinhold Bechstein (Hrsg.): *Tristan*. 2 Teile, 5. Auflage. Leipzig 1930 (Deutsche Klassiker des Mittelalters 7. u. 8. Band), Anm. zu 3539.

21 Peter Ganz (hrsg.): *Tristan*. Anm. zu 3539

22 H. de Boor, Anm. zu 436, 3.

23 *Lorelei* の *-lei* はこれとは語源が異なり、「岩」を意味する。

他方では不安と苦しみをもたらします。

## 2. 『イーヴァイン』における *hant* の用法

上で見たように、名詞 *hant* は具体的な「手」の意味からさまざまな比喩的意味まで実に多様に用いられるが、押韻文学の中でどのような役割を果たしているのか、『イーヴァイン』の用例を分析してみたい。先ず本来の「手」の用例から見よう。

- 24) *ez ist umben stein alsô gewant: / swer in hât in blôzer hant, /  
den mac niemen, al die vrist / unz er in blôzer hant ist, /  
gesehen noch gevinde.* (Iw. 1203-7)

この石にはこんな力があります。それを素手に着けている人はそれが素手に着いている限り、誰もその姿を見ることも見つけ出すこともできないのです。

ここは妖精の国とおぼしき森の国のアスカローン王に一太刀浴びせ、逃げ出した王を馬で追いかけて、うしろから止めの一撃を与えた瞬間に、落し門を前後に落されて、主人公が閉じ込められた場面である。例文は、絶体絶命の危機の中、秘密の通用門から入ってきた侍女ルーネテが、昔アルトゥース宮廷で助けてもらったお礼に彼を助けるべく、指輪を一手渡して、その指輪の石の効能について彼女が述べたものである。*stein* は指輪と同義である。姿を見えなくさせるこの指輪の力について、ルーネテはのちにもう一度触れ、イーヴァインの命が救われるように *den stein den ich iu hân gegeben, den besliezet in iuwer hant.* (1234f.) 「私がお渡しした指輪を指にはめてください」と促す。この箇所について G. F. ベネッケは *stein* がここでは「指輪」で、*stecket den ring an den finger* の意味だと注釈を付けている<sup>24</sup>。

---

24 Vgl. Hartmann von Aue: *Iwein*. Hrsg. von G. F. Benecke und K. Lachmann, 6. Ausgabe, Berlin 1966, Anm. zu 1235. ベネッケはここで、*daz vingerlîn an der hant* でも *in der hant tragen* でも意味は同じだと述べているが、改訂者 L. ヴォルフ (Ludwig

ちなみに、今日のドイツ語では「指輪」は *einen Ring am Finger tragen* のように指にはめるものであるが、中高ドイツ語では指輪は *rinc* ではなく *vingerlîn* と言い、いわゆる「指にはめる」という言い方を筆者はこれまでまだどの文献にも見たことがない。この作品に何度か出てくる場合も *daz vingerlîn an* (または *in*) *der hant haben* (あるいは *tragen*) である。

また、上の例の *blôz hant* 「むき出しの手」から次のように、「手のようにむき出しの」という直喩表現も可能になるらしい。

- 25) *er brâch sîne site und sîne zuht / und zarte abe sîn gewant, /  
daz er wart blôz sam ein hant.* (3234-36)  
彼は礼儀もたしなみも忘れ、着ているものも引きちぎり  
丸裸になってしまった。

*blôz sam ein hant* は「手のようにむき出しの」から「身に何も着けず丸裸の」という意味になる<sup>25</sup>。

*hant* はまた、その「手」をもっている「人」を表わす。

- 26) *daz ensol niht langer sîn / an einer ungetriuwen hant:* (3194-95)  
指輪はこれ以上不実な人の手に委ねておくわけには参りません。  
27) *mir erviht mîn eines hant / ein vrouwen und ein rîchez lant;* (3527f.)  
私は自分一人の手で身分の高い夫人と豊かな国を勝ち取った。

1年の期限を切って愛するラウディーネのもとを離れ、アルトゥース宮廷に戻ったイーヴァインが、騎士の楽しみに没頭するあまり期限を守らず、騎士にあるまじき約束違反という大きな過ちを犯した。26) は、ラ

---

Wolff) は第7版で前置詞を *an* から *in* に代えている。

25) そこからさらに比喩的に *hendebloz* なる言い方も可能になり、『ニーベルンゲンの歌』に一個所 *bi im wære Kriemhilt hendebloz bestân* (Nib. 1126, 3) 「(もしジーフリト殿が健やかな身でいてくれたとしたら) クリエムヒルトは手に何の財物がなくとも彼のもとにとどまったことであろう」という表現が出てくる。

ウディーネから絶縁を伝える使者として使わされたルーネテが愛の証にイーヴァインがもらった指輪の返還を求めた言葉である。「不実な人の手」とはもちろん、イーヴァインのことである。27) は、そのショックの大きさに気がふれてアルトゥース宮廷を出て森に迷い込み、獣のような生き方をしている状態から、ナーリゾーンの夫人の秘薬でもって癒された主人公が正気に戻った時、それまでのことを夢の中の出来事として振り返った台詞の一節であり、*mîn eines hant* は *ich allein* の意味である。このような「人」を表わす *hant* は比較的多く 7 例<sup>26</sup> 見られ、すべて行末で押韻に用いられている。

*hant* はまた、抽象名詞の書き換えになる。次の 28) は横暴な求婚者に苦しめられていたその恩人を彼の力で救ったあと、旅立つことになる場面で、*sîner gehülfigen hant* とは具体的には *sîner hilfe* のことであるが、それでは行が満たされず押韻もできないので、この表現になっている。

- 28) *dô diu vrouwe von Nârisôn / ir nôt überwant /  
von sîner gehülfigen hant, (3802-4)*  
ナーリゾーンの女領主が彼の助けによって  
彼女の苦難を切り抜けた時、

次に *hant* が前置詞句として比喩的な意味に使われている例を見てみよう。

- 29) *unz daz sî iu mit vrîer hant / gap ir lip unde ir lant, /  
daz ir daz soldet bewarn. (3157-59)*  
そして奥方は自ら進んで、あなたに守ってもらうために  
その身と国をあなたに委ねられたのです。
- 30) *si entlihen bêde ûz voller hant,  
und wart nâch gelte niht gesant: (7165-66)*  
彼らはふたりともたっぷりと貸し与え、  
資金を取りに人を送る必要はなかった。

---

26 27) の例以外に 743. 806. 2781. 2879. 6960. 7629.

29) の *mit vrier hant* は Th. クラーマー (Thomas Cramer) が *aus eigenem Antrieb* と訳し、M. ヴェールリ (Max Wehrli) が *aus freien Stücken* で表わしているように「自ら進んで」という副詞的表現である。30) は、黒茨伯のふたりの娘の遺産相続争いで、事情の分からないままそれぞれ姉妹の代理の戦士となったイーヴァインと彼の親友ガーヴァインが、お互いに相手が誰か知らないで壮絶な戦いを続ける様子を、お金の貸借関係になぞらえて表現したものである。彼らが互いに相手に与えた剣の打撃の甚だしさを、資金をたっぷり持って気前よく貸し与えることにたとえ、その打撃に対するすさまじい反撃を、借りたお金を十二分に返済することにたとえる。ûz voller hant は「たっぷり」との意味である。

方向を表わす *hant* は『イーヴァイン』には 2 例見られる。そのうちの 1 例を示しておこう<sup>27</sup>。

31) *hin wiste mich der waltman / einen sfic ze der winstern hant:*

その森の野人は私に左手の方への道を示しました。(598-9)

「種類」を表わす *hant* はふつう 2 格で名詞にかかることを第 1 章で見たが、『イーヴァイン』ではこのかかり方が逆になり、次のように *hant* が 4 格で 2 格の名詞を伴う例が 1 例見られる。次行の *genande* と押韻する必要からこのような格の入れ換えになっていると考えられる。

32) *aller der tiere hande / die man mir ie genande, /*

*vehnten unde ringen / mit eislichen dingen.* (405-8)

私がこれまで聞いたことのあるあらゆる種類の動物が

恐ろしい勢いで戦い、争っている (のを目にしたのです。)

ここは、アルトゥース宮廷でさる聖霊降臨祭に催された祝宴で、失敗に終わった自らの武者修行の旅での出来事を話すカーログレナントの語りの一節である。この部分は 2 行前の *da gesach ich mir vil leide* に従属する不定詞句であるが、ふつうは *aller hande tiere* となるところが、それ

---

27 もう 1 例は 265 の *nâch der zeswen hant* (右手の方へ)。

では押韻できないのでこの語順になっている。*hande* が 4 格であることは J. グリムも指摘しているとおりである<sup>28</sup>。「種類」を表わす他の 3 例ではいずれも *hande* が 2 格で 1 格または 4 格の名詞にかかり、その名詞で押韻している<sup>29</sup>。なお、4 行目の *mit eislichen dingen* も迂言表現の一種で、*eislichen* という一語の副詞を使う代わりに押韻するために用いられた代用表現である<sup>30</sup>。

以上、『イーヴァイン』に見られる特徴的な用法を見てきたが、この作品には *hant* の語形は 36 例見られ、そのうち 33 度、率にして 91.67% が行末で押韻に用いられている。押韻相手は 12 語あり、最も多いのが名詞 *lant* と動詞 *vinden* の過去 *vant* で、それぞれ 7 度ずつ<sup>31</sup>、*senden* の過去分詞 *gesant* が 4 度<sup>32</sup>、*pfant* が 3 度<sup>33</sup> などである。36 例のうち体の一部としての「手」は 18 度で、あとは何らかの比喩的な意味や人の言い換えである。

## おわりに

上で見てきたように *hant* はさまざまな比喩の意味で押韻にも大いに利用されている。『イーヴァイン』以外にも『ニーベルンゲンの歌』では 183 例中 178 度、率にして実に 97.27% も *hant* が行末にきて、そのうち 91 度、半数以上が *lant* と韻を踏んでいる。ここにも英雄叙事詩としてのこの作品の特徴が表れている。『パルツィヴァール』では用例数が非常に多く 281 例を数え、そのうち 218 度 (77.58%) 押韻に用いられ、最も多い押韻相手は「国」を意味する何らかの *lant* が 46 例<sup>34</sup>、動詞 *vinden* の

28 Vgl. J. Grimm, 3, 78.

29 *wol drier hande cleit* (2192), in *wären aller hande cleit* (4920) および *ander hande arbeit* (5713) である。

30 武市修：『中世ドイツ叙事文学の表現技法』、147-148 ページ参照。

31 *lant* とは 743. 1772. 2781. 2879. 3157. 3527. 3990 であり、*vant* とは 265. 284. 599. 2529. 3460. 5569. 6492. である。

32 2583. 3159. 3602. 7165.

33 1235. 7221. 7553.

34 単独の名詞 *lant* の他に合成語の国名 *Kukûmerlant* が *Cukûmerlant* 1 例を含んで 6 例、

過去 vant が36度であり、それらを含めて全部で41語と押韻している。この数は次に多い『ニーベルンゲンの歌』の24語と比べると圧倒的に多い。ここにも『パルツイヴァール』の用語上の多様性が見て取れる。『トリスタン』では121例中85度（70.25%）である。これらの叙事作品と比べると当時の社会批判文学である格言詩『イタリアの客人』では hant は30例と最も少なく、そのうち押韻は22度（73.33%）であり、この点でもこれまで見てきたジャンルによるこの作品の用語上の違いが読み取れる。

#### 引用テキスト

*Das Nibelungenlied*. Nach dem Text von K. Bartsch und H. de Boor, ins Neuhochdeutsche übersetzt und kommentiert von S. Grosse, Stuttgart 1997.

Hartmann von Aue: *Iwein*. Hrsg. von G. F. Benecke und K. Lachmann, neubearbeitet von Ludwig Wolff, 7. Ausgabe, Bd. 1: Text, Berlin 1968.

Wolfram von Eschenbach: *Parzival*. Mittelhochdeutscher Text nach der 6. Ausgabe von K. Lachmann, Übersetzung von P. Knecht, Einführung zum Text von Bernd Schirok, Berlin / New York 1998.

Gottfried von Strassburg: *Tristan*. Nach dem Text von Friedrich Ranke, neu herausgegeben, ins Neuhochdeutsche übersetzt, mit einem Stellenkommentar und einem Nachwort von Rüdiger Krohn, 2., durchgesehene Auflage, 3 Bände, Stuttgart 1981.

Rudolf von Ems: *Der guote Gêrhart*. Hrsg. von John A. Asher, 2., revidierte Auflage, Tübingen 1971 (ATB 56).

*Der Wälsche Gast des Thomasin von Zirclaria*. Hrsg. von Heinrich Rückert, mit einer Einleitung und Register von Friedrich Neumann, Berlin 1965.

付記：本稿は、科学研究費・基盤研究（C）「中世ドイツ叙事文学に見られる表現技法の解明」（課題番号20520310 研究代表者：武市修）の助成を受けて執筆されたものである。

---

Lälant 4 例、Engellant が<sup>s</sup> 1 例である。その他に hant の押韻相手の lant は動詞 lenden の過去分詞 gelant が<sup>s</sup> 1 例と scheneschlant 「内膳守」が<sup>s</sup> 5 例ある。

## Zum Gebrauch des Substantivs *hant*

— unter besonderer Berücksichtigung  
der Endreimdichtung —

Osamu TAKEICHI

Im Anschluss an die bisherigen Recherchen der Umschreibungs-  
ausdrücke durch die Substantive *dinc*, *êre*, *liebe*, *geschicht*, *gewin*, *mære*  
und *lip* wird in der vorliegenden Arbeit die Gebrauchsweise des Sub-  
stantivs *hant* in der mittelhochdeutschen gebundenen Dichtung unter  
besonderer Berücksichtigung der Endreimdichtung behandelt.

Im mittelhochdeutschen Wörterbuch wird *hant*, in zwei Gruppen  
geteilt, mit vielen Belegen aus verschiedenen Werken erklärt: in der  
eigentlichen Bedeutung mit deren bildlichen Wendungen und in der  
Bedeutung „die Seite, nach welcher hin man etwas legt“. In die letztere  
gehören die Belege, in denen *hant* „Art, Sorte“ bedeutet.

Außer einigen Beispielen in ihrer eigentlichen Bedeutung dient *hant*  
in vielen Belegen zur Umschreibung wie *mîn hant* statt *ich*, *von Kant*  
*des herzogen hant* statt *der herzoge von Kant* usw. In solchen umschrie-  
benen Fällen bildet *hant* meistens mit irgendeinem Wort einen Reim.  
*hant* steht am Versende im Nibelungenlied 178mal von 183 Belegen  
(97,27 %), im Iwein 33mal von 36 Belegen (91,67 %), im Parzival  
218mal von 281 Belegen (77,58 %), im Tristan 85mal von 121 Belegen  
(70,25 %). Im Gegensatz zu diesen epischen Werken kommt *hant* im  
Wälschen Gast, der zur Spruchdichtung mit sozialer Kritik gehört, am  
mindesten vor: 30mal, wovon *hant* 22mal (also 73,33 %) zum Reimen  
dient. Der häufigste Reimpartner von *hant* ist das Substantiv *lant*. Auf  
*lant* reimt sich *hant* zum Beispiel im Nibelungenlied 91mal, im Parzival  
46mal, im Tristan 42mal, im Iwein 7mal und im Wälschen Gast 8mal.

In der mittelhochdeutschen Dichtung kommt es sehr darauf an, wie  
geschickt die Dichter Reime und fließende Verse bilden. Zu diesem

Zweck benutzen sie alle sprachlichen Möglichkeiten, worunter die Umschreibung ein wichtiges Mittel darstellt. Das Substantiv *hant* spielt in diesem Punkt eine große Rolle.